

# 駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 3 号

昭和 59 年 3 月 24 日 発行

明治鍼灸大学 附属図書館

〒 629-03 京都府船井郡日吉町  
TEL. 07717-2-1181 (代)

軽・薄・短・小



最近、時々みかける軽薄短小なる文字がある。この文字は私の記憶では軽薄と短小からなり、何れもあまり良いイメージをとまわらない。広辞苑によると前者は①軽々しい事、②思慮あさはかで、篤実でない事、③おせじ、等を意味し、後者は文字どおり、短く小さい事、を意味し余り歓迎すべき字句ではないが、軽・薄・短・小と四字に分けると電子機器の仕様、傾向を示すものであって、より薄く、より軽く、より短く、より小さく、を模索し、努力しているのが現状である。

軽薄短小に対する文字は、重厚長大で、上記同様 2 字毎に分けてみると重厚、長大となり、重厚とは人柄・態度・制作等が重々しく、しっかりしてよい事、落付きのある事、長大とは、①丈が高く大きい事、長く大きい事、②年たった事、おとなとなる事、③すぐれた人を意味し、よいことづくめの語句であり、先年来流行している「大きいことはよいことだ」にも言い当てはめられるが、これもよいことづくめでもない様である。最もよい例が第 2 臨調による行政改革である。

大学、特に図書館についてみる時、放ってお

図書館長 武 田 創

けば、経費にしろ、蔵書数にしろ、ひいてはスペースにしろ、増大の一路をたどるものである。このため、時々購入図書・雑誌の洗い直しをすること、又マイクロ・フィルム化が必要である。殊に本学の如く本邦は勿論、世界的にも特殊な大学に於いては、東洋医学のうち鍼灸に関する古今東西の文献の収集はその使命でもある。これを実現するためにも早急なマイクロ・フィルム化の必要性を痛感する次第である。

更に学生の勉学の利便を計り、その効率化の為に、各教科目のビデオテープが必要であり、そのビデオテープも本学教授陣の製作によるものを求めたい。それは教育効果の向上に最もつながるものであるから。

通勤車中で女性を見て、短くてよいものはスカート、長大で困るものは頭陀袋である。阿々！。



# ウィーンの図書館

東洋医学基礎教室 高島文一

1983年10月17日より4日間、ウィーンの王宮に於て、ワールド・コンGRESS・オン・サイエントフィック・アクパンクチャー（科学的鍼術学会）が開かれた。

主催者は、ウィーン大学医学部内の、鍼術研究所長のビシュコ博士である。この人は、もと耳鼻科医であったのが、鍼術に興味を覚え、既に20年近く前から、ウィーン大学内に研究所を設け、日常の鍼臨床を行っているのである。

ウィーンは壮麗な都である。国連都市として国際センターを持つ近代的な一面と、長い伝統を持つ芸術、文化の中心地であった遺跡が、学問・芸術に対する豊かなムードをつくり出している。

市の中心部は、リングと称する円形の道路で取りかこまれている。これは19世紀後半につくられたもので、すべての遺跡がそのまま保存されていると言っても過言ではない。リングの中央部に、カトリック文化の中心地ステファン大寺院がある。こゝから放射状にケルトナー通等の繁華街が開けている。

18世紀、カール六世になって、バロック芸術の華が開いた。バロックとは、ポルトガル語で、「ゆがんだ真珠」を意味する。古典的な調和を破り、誇張し、激情的な力強い表現を行うものである。

カール六世の長女マリヤテレジアが帝位につくと、ウィーンの華やかさは更に加わった。100キロを越すという堂々たる女丈夫で、16人の子供を生み、国民に慕われる存在であった。その末娘がマリヤアントワネットであり、ルイ16世と結婚して、フランス大革命の際に、ギロチンの露と消えた。この当時のバロック芸術の精華がそのまま残っているのであるから、まことに賑やかな街となるわけである。

ステファン寺院のすぐ横のグラウベン通りというウィーン子のデートの場所と言われる中心の高さ30mにも及ぶ彫刻を見上げて、感にたえない思いで良く見ると、それは1679年にペストが鎮静した感謝の記念碑であった。

ウィーン大学の医学史に関する図書館には、8万冊の蔵書があり、世界一の規模を誇っている。

ウィーンを流れるダニューブ河の上流メルグという所に、カトリックのベネディクト派の教会がある。こゝはあたかも城郭のような構えをしており、修道士の棟と、大僧正、王侯、貴族の棟が平行して存在し、その廊下の長さは直線で196mにも及んでいる。

このつゞきに図書館がある。柱、天井には信仰の証しとなるような寓話が彫刻されたり、画がかれたりしている。天使が飛びかう天井画は、賢明、正義、意欲、中庸の四大信条を現わすものとされている。この絵は1731年パウル・トローゲルが画いたものである。扉の横に四個の木像の立っているのは、法学、医学、神学、哲学の四つの学問を表現している。地球と天体の二つの大きな球は1670年頃の古い文献から取ってきたものである。ヴィンセンゾ・コロネリの作である。

ガラス戸棚の中には、興味のある手書きの本や、初期に刊行された本が陳列されている。図書館には、約85,000冊の本が所蔵されている。1200の価値のある手書きの本は、大部分は15世紀のものであるが、850は15世紀以前のものであり、又800の17世紀、18世紀に写された本は、貴重な原本が散佚してしまっているものである。

第1次世界大戦までは、重要な著作はすべて購入せられてきた。殊にバロック時代のものは探し求めても得られないような文献が、次々に

加えられてきたのである。

図書室の前の室には、ロココ風の金銀の格子があり、その天井絵は矢張りパウル・トローゲルのものであり、夢の寓話を表現している。この図書室にはドームがあり、螺旋階段を上って行くと、二つの小さな読書室がある。この本棚は寄木細工のものであり、天井絵は1768年ヨハン・ベルグルにより画かれたもので、寓話が

異国風の優美なタッチで画かれている。

これらの蔵書は、殆ど羊皮紙に書かれたり、木版されたりしているので、その価値は、まことに計りがたいものがある。

このような図書館が数多くあるウィーンの街は、芸術、学問の宝庫であると言っても過言ではない。

## 読 書 三 題

### 自然科学教室 藤 本 直 正

#### 青邨先生と読書

信州にいた頃私が俳句の指導をうけていたのは、山口青邨先生の「夏草」を通してであった。木曾の鳥居峠・諏訪の和田峠のかすみ網獵、木曾藪原宿のお六櫛づくりの吟行を先生とともに楽しんだこともあった。今私の手元には、先生に書いていただいた短冊（人それぞれ書を読んである良夜かな）と先生の句集「雪国」の表紙の裏にしたためられた（書屋くらく金魚の紅の漾々と）の句が残されている。

先生の句には、読書と書齋を題材とした句が非常に多い。手元にある先生の句集の中から300句を拾って、そのなかにある読書か書齋を読んだ句を選んでみたら20句もあった。7%にもなる。試みに他の2、3の俳人の句をみたら、ほとんど見当らなかつた。如何に青邨先生が心から書物を愛し、書齋を愛されていたかを知ることができる。読書・書齋を読まれた先生の句で、私の好きなその他の句を掲げてみたい。

本を読む菜の花明り本にあり  
炭箆に炭はみちたり書を読まな  
鶏頭を屏風の如くわが書屋  
わが書屋落花一片づつ降り  
秋の空書齋はひくくありと思う

青邨先生は、東京帝国大学工学部の教授で、自宅の庭を「雑草園」と呼んでおられ、上に掲げた句には、その庭の様子もよくうかがわれる

が、読書を楽しまれ、書齋を愛された喜びの様子が充分にうかがわれる。

先生が書齋で読まれた書物は、好きな俳句の本もその他の文学書も勿論あったろうが、多かったのは先生の専門の工学書であったに違いない。

古本の本郷若葉しんしんと

先生も良い本、欲しい本を求められて本郷通りの古本屋をよく歩き廻られたことと思う。

私も先生のように書物を愛し、書齋を愛せる人でありたい、そうありたいと思う。この年になってそう思う。しかし もう遅いかも知れない。

先生の作にこんな句がある。

書屋わが死所なり花菖蒲

青邨先生は、92才でなお健在でおられる。

#### 書物を選ぶ

この大学図書館の蔵書は、25 000冊ぐらいと聞いている。教員が選んだり、図書館側が選んだりした学生の勉学のための参考書や研究のためのものが東洋医学書を中心にして学生・教員に役立つように数年間かかって整えられている。この図書館が主に買い入れている紀伊国屋書店の梅田店には、現在約50万冊の書籍・雑誌が店内にならべられていると聞いた。すると、そのたった5%だけが選ばれて、この図書館に入ったことになる。

2万5千冊の図書館の本を、難しいことだ  
もし毎日1冊ずつ読んだとしたら、それでも全  
部読みきるには、70年近くもかかる。私が生  
まれたその年から毎日1冊ずつ読んで今やっ  
と読み終った勘定になる。学生諸君に役立つ書物  
が選ばれて大学図書館に備えられているといっ  
ても決して全部読みつくす必要は勿論ないが、  
役立つ書物を読むだけでも、こんなに時間がか  
かるものである。この図書館の本も現在紀伊国  
屋にある書物の5%に過ぎない。ずい分沢山の  
本が発行されているものだなと感心するととも  
に、読む本を選ぶことの大切さを痛感した。こ  
う考えると、少くともくだらないと思われるマ  
ンガ本などは読む時間はない筈である。

夏休みに、学生諸君に（生物学に関する書物  
を読んで、その内容とそれに対する意見、感想  
などをレポートするように）と宿題を出した。  
多数の諸君は、ちゃんとした書物を選んで、良  
く理解した報告を提出してくれたが、なかには  
専門書でない週刊誌のトピック記事や、大衆的  
な新聞記事を選んだもの、全く同じ本の同じも

のを数人の者が同じように、とりあげて報告し  
たものたちがいた。

非常に多数の本が発行されているのだ。多過  
ぎて選択するのに苦労はしても、通俗な週刊誌  
のトピックの記事しか読むものがないとか同じ  
ものを数人で読むしか他に本がないとか、そん  
なに良い書物が私底しているとは、とんでもな  
い。読む書物を選ぶことは大変なことであり、  
また大切なことである。

### 二つの読書

多田先生が前号に「専門書を読むことは当然  
のことなので履歴書の趣味の欄に「読書」と書  
いてよいか疑問に思えた、との意を書いておら  
れた。私は今では、こう考えている。「読書」  
には、2種類あって、私が小説を読んだり、俳  
句・和歌の書を読むのは趣味の読書であるが、  
生物学に関する書物を読むのは別の読書である  
と。前者にはほのぼのした楽しみがあるが、専  
門書を読む読書には、かなり血みどろなところ  
がある。

---

## 知識の宝庫へ招待

東洋医学教室 早 崎 芳

人間が生まれて死ぬまでの間、あらゆることに  
出会いと別れがあるように、与えられるという  
ことは、それなりの時と場と意味があるように  
思われる。

この大学が建てられた頃、私は大変感動する  
一冊の本と出会うことができた。

その本の名は、鳥ヶ岳（大学講堂北側の山の  
名）という本であった。（本学図書館に一冊蔵）

先に「月刊東洋医学」誌（S56 11. P 7）  
にも書いたこともあるが、その頃教員室に朝夕  
軟らかな陽の影を見せて、「母の様に優しく姿  
を見せてくれる山」があった。

仕事に疲れた時、その山を眺めると不思議に  
安らぎを覚えることもあった。何という山なの

か……と思いつく付会ったことである。四季折  
々に変化があり、美しさがあり、妙に親近感を  
覚えた。

西陽の中に心からの、安らぎがあった。そう  
して何気なく見ていたその山が、ある日一冊の  
本の表紙となって、私の机の上に置かれた。そ  
のとき、すぐにピンと来たので、すぐ本とその  
山とを窓の所で見比べて驚いたのであった。

それは本に書かれた内容をして、涙なくして  
は読めないこの土地についての、本当に起った  
出来事としての実話でもあった。

この物語は、治る見込みのない病氣と闘う一  
患者と、それを見詰める漢方医芦沢謙助先生  
（明治初期、日吉町胡麻で開業11代目）との、

命を命たらしめる信仰の強さにおいて、描かれた自己完成への物語であった。

病いは結局行きつくところ、治るというより自己完成への信仰を強めるという心境に至るまでの、この物語は現在の医療のあり方にも、生命についての考え方にも、たいそう必要なことに思われる。

「痛」といえば、身体的な痛みだけを考えがちだが、人間の持つ痛みはもっと複雑である。私はこの大切なことを、この本から更めて学ぶことができたら、私の生き方が変わった。……

この大学で東洋医学を学ぶ諸君は、それぞれ与えられた専門分野において、書物を選び知識を得るだけにとどまらず、自己たらしめる最も

困難なことを、めいめいの与えられた立場、力において成し遂げてほしい。その作業が医療人には、大そう必要なことである。

自然をバックとしたこの環境の地であって、自分自身を書物の宝庫の中で、深く見詰め自己の内面を整えてほしい。これは人間だけに特に若い人に与えられた許された自分自身の意志の問題でもある。

自己を求めることにより、自分の真の与えられた運命を生きることは、命を与えられたことに対して、我々が果す事のできる義務なのであり、また医療人としての自覚を、与えられた仕事の中に見出し、生かされることを祈るものである。

## 西洋図書館小史 (その三)

### 附属図書館 八木克彦

#### Ⅱ 中世篇

最近、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の肝煎りで、15世紀のドイツで流布された『貧者の聖書』ならびにプトレマイオスの『宇宙誌』が刊行されましたが、これは世界最古の図書館の一つヴァチカン図書館が秘蔵する手稿本をファクシミリ化したものです。ヴァチカン図書館（ローマ法王庁図書館）はローマ帝国末期4世紀頃創設されたと伝えられていますが、アヴィニヨンの幽囚時代（1309～77）を経てローマに帰った後、この図書館にはニコラス五世（1447～55在位）、シクストゥス四世（1471～84在位）等の努力によって数多くの手稿本（書写本）が蒐集され、現在では書写本だけで、65,000部が所蔵され、この中にはキケロの「共和政体について」、4世紀に筆写された「ヴァチカン本・聖書」、ヴェルギリウスの写本などの希観書が含まれています。

4～5世紀の民族の大移動と打続く戦乱によって、古代の大図書館が姿を消してゆくなかで、

新しく文化の担い手・守護者となったのはキリスト教であり、またその修道院並に附属図書館でありました。

カシオドルス（Cassiodorus 487～583頃）は、当時イタリアの支配者であった東ゴート族の王テオドリクスに仕えたローマの貴族の一人でしたが、540年に退官したのち、南イタリアのカラブリアにヴィヴァリウム（Vivarium）修道院を建てました。この修道院はキリスト教アカデミーの一種とも見做され、古文献を筆写する写字室（写本工房）、書物の集積所である図書館を併設し、図書館には図書館の利用法、所蔵文献の一覧表が備えつけられていたといわれます。カシオドルスは、修道僧たちにキリスト教関係の文献だけでなく、ギリシャ、ラテンの世俗的な文献をも筆写させたのですが、このことは彼が古典を愛し、古代の学問を後世に伝えようと思念したことを物語っています。

西欧における修道院生活の始祖といわれる聖ベネディクト（St. Benedict of Nursia

480~544)も幾つかの修道院を開きましたが、特にローマとナポリの中間点にある Monte Cassino の古代のアポロ神殿跡に建てた修道院は最大規模のものであり、久しく西欧の宗教生活の中心となっていました。こゝは、モンテ・カシーノの戦として第2次大戦中の激戦地としても知られているのですが、独自の戒律—沈黙・祈禱・労働—の下で多くの修道僧たちが作りつづけた写本や細密画は、その一部が今日迄伝って、往時の僧達の精進を偲ばせています。

その他の修道院としては、フランスのリュクシュ修道院、ドイツのフルダ修道院が著名であり、フルダは一時期には数十人の写字僧をかゝえて筆写に励み、当時(7~8世紀)この地方の学問の中心となっていました。

修道院の写字室(写本工房)は、時には図書館の役目を果たす大広間であり、中央には一つの大テーブルが置かれ、壁に面して幾つもの、前に傾斜した机が並んでいました。又、小さな個室に入って筆写する修道僧もあり、時には、修道院の廻廊にしつらわれた写字室も見られましたが、気候の悪い時には大変な難行であったことと想像されます。

モンテ・カシーノをはじめとする中世の修道院は戒律の一つ(労働)としての筆写によって、キリスト教関係のみならず、所蔵するすべての文献・記録の写本をつくり、複本を増やし、精緻な細密画で装飾をほどこして、古代からローマに至る人類知識の集積を書物のかたちで守り伝えることによって、今日の人類に計り知れない貢献を果たしたものと云えましょう。

さて、AD800年に西方世界を統一してローマ皇帝となったシャルルマーニュ大帝(カール大帝)は、宮廷に彼専用の図書館を作らせるほど学問好きで、大いに文芸を鼓吹し、一般教育を普及させて、世に云うカロリング・ルネサンスを開花せしめました。

大帝はヨーロッパ各地から幾人も学識者を呼び寄せましたが、これらの学者の中で、英国から招かれたアルクイン(Northumbrian Alcuin of York 735~804)は数年間宮廷学校長をつとめ、後年トゥールの聖マルチン修道院に移ったのですが、彼はこの修道院の写本工房を修復・発展させ、また傘下各地の修道院に工

房を新設、または修復させて古典の筆写、研究を推進するとともに、修道院に学校を附設してカロリング朝時代の教育レベルを大巾に引き上げたのです。

シャルルマーニュ大帝の没後、843年のヴェルダン条約および870年のメルセン条約などによって、大帝の領土が、大体ドイツ、フランス、イタリア三王国の形に分割され、今日の三ヶ国の基盤となったことは、周知のとおりです。

9~10世紀のヨーロッパは南からのイスラム(サラセン)の侵寇、北からのヴァイキング、東からのハンガリー(マジャール)人の荒掠により各地の修道院並びに図書館も大きな被害を受けました。

11世紀になると十字軍がおこります。ご承知のとおり十字軍は1078年イスラムの支配者セルジューク・トルコが聖地エルサレムを占領したことに端を発し、ビザンチン帝国(東ローマ帝国)の要請で、時のローマ法王ウルバン二世(Pope Urban II)が令を発し(1.095)、第一回の遠征が行われ、以後二世紀にわたって度重なる遠征が行われたのです。

当初の宗教戦争は徐々に変貌し、特に第四次十字軍はその鋒先をビザンチン(コンスタンチノーブル)に向け、1.204年これを占拠掠奪しています。

当時のコンスタンチノーブルは、ヨーロッパ最大の最も富裕で壮麗な都市であり、高度な文化を誇っていました。こゝにはコンスタンチヌス帝の建てた大図書館があり、戦火を逃れた古代ギリシャの文献が集積され、中世におけるギ



View of Fulda, Hesse, Germany, showing the abbey church of 819 in the center. Woodcut of 1550.

リシヤの学問の本拠地となっていたのですが、この十字軍のために多くの文献が散逸していったのです。しかしながら、アリストテレスの文献を含むギリシヤの古典がヨーロッパに持ち帰られ、古代ギリシヤの優れた哲学・幾何学・天文学等に接したことは、その後のヨーロッパの学問発達に大きな刺激となったのです。

12世紀に入るとヨーロッパ各地に大学が誕生します。中世前半において文化・教育に大きな役割を果たした修道院学校や聖堂学校は、都市の勃興に伴い、漸次その教育的機能を地方自治体の半世俗的教育機関に移すようになりましたが、より高い学問を求める人達は、よりよい教師を求めて各地を彷徨し、たまたま優れた教師が見つかる、多数の学生が集ってきて、そこに一つの集団が出来ようになりました。

大学を意味するユニヴァーシティ University の語源 Universitas が、もともと組合または団体の意であったことから分かるように、当初の大学は、教師または学生の一種のギルド的自治組織であり、やがてこれらの団体がローマ法王から特別の許可を得、特権と自由を保証されて、その後、教権、帝王権と並び称せられる中世の三大勢力の一つに成長していったのです。

世界最古の大学の一つとされるボローニア大学は11世紀後半の聖職叙任権争いから法律研究が盛んになり、各地から学生が集って一つの共同体を結成し、これが基となって発達してゆきました。法学のボローニア大学と並んで著名なパリ大学は、パリ司教座大聖堂附属学校が主体となり、幾つかの修道院学校が合体して生れたものです。「愛と修道の十二書簡」で名高い中世最高の弁証神学者アベラール (Pierre Abelard 1079~1142) の下には各地から多数の学生が蟄集したと伝えられています。

ソルボンヌ大学はパリ大学の中の文・理2学科の通称ですが、1253年頃ルイ9世の宮廷司祭ソルボンヌ (R. de Sorbon 1201~1274) の創設にかゝるもので、図書館についてもソルボンヌが遺贈した書籍をもとに、各方面からの寄贈書を集めて、1480年頃には独立した建物をもつようになっています。閲覧室には参考図書や貴重図書が読書台に鎖につないで置かれ(約

300冊)、また1,000冊以上の本が貸出用として別置されていました。当時は書物を購入出来るものは特に富裕な特定の人に限られ、大部分の学生は教師または少数の図書所有者から借りて勉強するのが普通であり、また、図書館から本を借り出すにも保証金或は自己の所有する本を担保として預け入れることが必要とされていました。

中世においては、ほとんどの図書は筆写によって生産され、なかには一冊の本の筆写に一年以上もかゝるものがあり、一冊一冊の本は、まことに貴重な宝であったので、盗難を防ぐために、このような厳重な措置がとられていたのでしょう。いつの世においても不心得者が多かったとみえます。鎖のついた本は、ケンブリッジ大学図書館では1620年代まで見られ、英国の教会においては18世紀初頭まで見受けられたといえます。

図書に対するこのような厳しい管理は、15世紀中葉グーテンベルグ (Johannes Gutenberg 1394~1468) によって活版印刷術が発明され、図書の大量生産が可能になったことにより徐々に緩和されて、図書館における一般向け貸出もようやく容易となってきました。(つづく)



近着東洋医学系図書一覽 (昭和58年1月以降収蔵分)

近世漢方医学書集成 70~75巻79~80巻97~100巻108巻~111巻 大塚敬節等 編 名著出版 昭57~58	ひとり出来るお灸大革命 押谷晴 サンケイ出版 昭58
中国漢方医語辞典 中医研究院等 編著 中国漢方 昭55	難經古注集成 第1冊~第6冊 篠原孝一 監修 東洋医学研究会 昭57
インドの自然療法—アユルヴェーダ医学の実際 Dastur, J.E. 著 伊藤和洋訳 本郷企画 昭57	東洞全集 吉益東洞 思文閣 昭55
インドの自然療法 別冊 植物図鑑 伊藤和洋 編 本郷企画 昭57	臨床経絡経穴図解 山下 詢 医歯薬出版 昭57
運氣論 診 解 全七巻 復刻版 岡本一抱子 東方会 昭57	鍼灸治療基礎学 代田文誌 医道の日本社 昭57
経絡経穴学 復刻版 駒井一雄 續文堂 昭51	難經ハンドブック 池田政一 医道の日本社 昭58
柳谷素靈 選集 上、下、別巻 柳谷素靈 續文堂 昭54	傷寒論による漢方と鍼灸の統合診療 小倉重成 創元社 昭58
女性のための漢方の名薬 壮快編集部 編 マキノ出版 昭53	康平傷寒論 大塚敬節 校註 日本漢方協会 昭58
老化を防ぐ漢方の名薬 壮快編集部 編 マキノ出版 昭54	臨床医の漢方 第2版 木下繁太郎・鎌江真五 医歯薬出版 昭58
医心方 鍼灸篇 現代訳付原文 丹波康頼 出版科学総合研究所 昭57	方函・口訳・附症候別索引 浅田宗伯 燎原書店 昭58
医心方 食養篇 現代訳付原文 丹波康頼原著 望月学現代訳 出版科学総合研究所 昭51	脈診入門 山下 詢 医歯薬出版 昭58
医心方 原文 丹波康頼原著 出版科学総合研究所 昭53	熱鍼刺激療法 平田式十二反応帯 間中喜雄 医道の日本社 昭58
医心方 序説篇 精釈 丹波康頼原著 広島東洋古典医学研究会著 出版科学総合研究所 昭53	閃光記一病気・自然・人生・生死一 代田文誌 医道の日本社 昭58
古典養生書名著選 (1)~(5) 曲直瀬玄朔他 出版科学総合研究所	漢方今昔座談 細迫陽二 医道の日本社 昭58
鍼灸医学概論 藤原知・小野太朗 医歯薬出版 昭57	経絡と指圧 増永静人 医道の日本社 昭58
近世漢方医学史 一曲直瀬道三とその学統一 矢数道明 名著出版 昭57	経絡治療のすすめ 首藤伝明 医道の日本社 昭58
脉状診の研究 井上雅文 自然社 昭55	中国傷寒論解説 劉渡舟著・勝田正泰等訳 東洋学術出版 昭58
秘方一本鍼伝書 実験実証 柳谷素靈 医道の日本社 昭56	傷寒論医学の継承と発展 一仲景学説シンポジウム記録一 東洋学術出版 昭58
経絡十講 一最新中国の経絡研究展望一 杉充胤 編訳 医道の日本社 昭55	カイロプラクティック・テクニック、明解・図説 ステーツ・アルフレッド著 竹谷内・須藤訳 科学新聞社 昭58
SSPセミナー講演集 SSP療法研究会編 SSP療法研究会 昭58	奇穴図譜 隆瘦燕・朱汝功編著 間中喜雄訳 医道の日本社 昭56
針灸臨床23000例 間中喜雄 監 自然社 昭56	解剖経穴図 森秀太郎 医道の日本社 昭57
針灸舌診アトラス 藤本連風等 自然社 昭58	針灸学原論 木下晴都 医道の日本社 昭58
類経・類経図翼・類経附翼 第1分冊~第5分冊 経絡治療学会編 経絡治療学会 昭53	腹證奇覧 全 稲葉克文礼、和久田寅叔虎 医道の日本社 昭58
経絡の本質と気の流れ 本山博 宗教心理学研究所 昭56	近世漢方医学書集成 101, 107 大塚敬節他編 名著出版 昭58
針灸集錦 上巻 鄭魁山 編著 自然社 昭58	慈禧光緒医方選議 陳可冀等編著、宮川マリ訳 東京美術 昭58
東洋医学研究集成 I. 経絡経穴の研究 芹澤勝助 編 医歯薬出版 昭54	

あとがき

雪にみとれて、亡ったり、転んだりしているうちに、今年もまた卒業生を送り出す三月になってしまいました。これから社会に出て活躍される諸君に、この図書館で勉強されたことが少しでも役立つことを祈っております。

お忙しい中、ご寄稿いただいた先生方に心からお礼を申し上げます。 (K. Y.)